大正九年七月三十日發行

婦人衛生雜誌

第三百五十四號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

婦人衛生雜誌

第三百五十四號目次

講演

○酒害豫防と婦人の力　醫學博士　片山國嘉

叢談

○睡眠の話　醫學士　福田得志
○外科叢談（承前）　ドクトル　吉川春次郎

育兒

○兒童愛撫の方法に就て　高島平三郎

雜報

○新婦人協會の議案
○女子大學夏期講習會
○衛生思想普及並徹底に關する意見

會報

○本會例會
○新潟支會
○入會者
○轉居
○寄附

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

謹告

來る八月及び九月の例會は本會規則に依り例年の通り休會致候也

暑中特に會員諸姉の健康を祈る

大正九年七月

私立大日本婦人衛生會

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや知識を備へ人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんこと皆ともに希はざるはあらじされどもし其身健康にあらざれば此生活を得んこといと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の知識はいとも緊要の事にして殊に婦人のもつぱら學ぶべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相競て起り婦人社會も漸く其面目を改めんとするは實に喜ばしきことなりされど夫の衛生の事に至りては更に之に注意を拂ふ者少なきはまことに惜しきことなり因りて頃日同志の婦人相集ひ私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上の談話を乞ひ[illegible]に相研究し[illegible]の務めに盡すにあらんとす茲に本會旨趣の精神を敘べて廣く江湖の諸姉妹に告げ其贊成を仰ふぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治三十二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は洽く婦女子をして人生の幸福を保持する方法を講究し衛生上の知識を普及せしめて社會全般の福祉を進むるにあり◎第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し東京に置き[illegible]◎第三條　本會の事務所は[illegible]◎第四條　本會々員は[illegible]入會せんとする者は[illegible]本會に於て[illegible]◎第五條　[illegible]會費[illegible]◎第六條　[illegible]◎第七條　[illegible]◎第八條　[illegible]◎第九條　[illegible]◎第十條　[illegible]本會に左の役員を置く　總裁一名、會長一名、副會長一名、理事若干名、評議員二十五名、書記若干名◎第十一條　會長副會長理事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は理事の推薦に依り會長之を命す但書記は會長に於て[illegible]

由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし◎第十二條　會長は本會を總理し會長事故あるときは副會長之を代理す理事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は會長の命を受け庶務に從事す[illegible]◎第十三條　[illegible]◎第十四條　[illegible]◎第十五條　[illegible]◎第十六條　[illegible]◎第十七條　[illegible]◎第十八條　[illegible]◎第十九條　[illegible]◎第二十條　[illegible]◎第二十一條　[illegible]◎第二十二條　[illegible]◎第二十三條　[illegible]◎第二十四條　本會の會計は一ヶ年毎に決算し[illegible]◎第二十五條　地方に於て本會會員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得[illegible]◎第二十六條　[illegible]◎第二十七條　[illegible]◎第二十八條　[illegible]◎第二十九條　[illegible]◎第三十條　[illegible]◎第三十一條　[illegible]◎第三十二條　[illegible]◎第三十三條　[illegible]◎第三十四條　[illegible]會長評議員會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

東京市本郷區駒込千駄木町五十番地　私立大日本婦人衛生會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

酒害豫防と婦人の力

醫學博士　片山國嘉

今日は此の御會に於て一場の講話を致すの光榮を得まして、喜んで早速出席致しました譯であります、演題は只今庄司君の御紹介下さつた通り「酒害の豫防と婦人の力」斯う致して置きます。

先づ酒害豫防と云ふので、――酒の害を豫防する、――此事に就ては是れまで禁酒運動といふものが中中盛で、安藤太郎君の如きは、多年禁酒同盟會といふものを作られまして此事に力を盡されて居ります。此頃は又京都大阪方面に於て報國禁酒同盟會といふ様な會も出來まして、彼方此方で禁酒運動に力を盡すやうになつて參りました。獨り日本でさうなつたばかりでなく、外國に於ては殊に此運動が盛であります。米國の如きは現に全國禁酒といふ様な事が、憲法の改正に依つて決定せられまして、もう本年一月から米國に於ては全部禁酒になつて、唯有合せの酒を秘密で飲んで居るといふ様なことは無論ありませうが、表向きは此の一月からが北米合衆國全國禁酒になりましたのであります。夫れに先つて露國が今日の如き瓦解の狀態に陷りませぬ前、即ち帝政であつた時には、戰爭が始まるや否や直ちに禁酒令を施かれまして、此の帝政の覆る時まで、僅か二三年でありましたが非常に良い成績を擧げて居りました様な工合に、酒の害を豫防する――禁酒といふ様なことは、もう世界的の運動で決して日本に止つた問題ではありませぬ、寧ろ日本に於ては他の文明國に比べれば、餘程劣つて居ると云はなければなら

ぬのであります。此の點に於て劣つて居るといふことは、唯時日に於て遅れるといふばかりでなく、非常に國家の不利益である、此の人の目の屆かぬ所に非常な影響があるのであります、是れは私が特に此の事に就て憂ひて居る點であります。今後も及ばずながら酒の事に就ては及ぶだけ盡力してみたいと思ひますが、此の問題は唯飲む人一個人の問題でなくして、社會の大問題であり、國家の大問題である、或は此の大和民族といふやうなものゝ永遠の利益にも大影響があるといふ大きな問題である。此の大きな問題を世間では餘り重く視て居らぬ、輕く視て居る、追々此の事を熱心に論ずるものがありましても戯談半分で取扱ひ、眞面目で取扱はないといふのが實際であります。多年衆議院に於て根本代議士から「未成年者飲酒取締法」といふものゝ案が提出されまして、年々衆議院をば通過して居るにも拘らず、貴族院では何時も否決になり或は握潰しになるといふやうなことで、未だに議會を通過するといふやうな運びに至りませぬ、今年は通過致しますかと思ひましたら議會が解散になつて又どうなるか分らない、斯ういふ工合で日本の酒害豫防問題或は禁酒問題といふことは誠に冷淡に取扱はれて居ります。併しながら是れが重大問題であるといふことは、早く國民一般に承知して貰ひたいと思ひます。何故ならば國家の前途に非常な大影響があるからであります。私は幸か不幸か、さういふ事を私の專門とする學科の關係上、其の害の如何にも多いことを能く知る機會を持つて居ります、夫れ故其の感が他の人よりも一層深い譯であります。

そこで先づ此の演題に就て御話するのには、第一に酒害豫防でありますが、其の酒害――酒の害――といふものはどんなものであるか、害の有る事は世間の人が皆朧氣ながら承知して居ります、けれどもさう恐るべきものであるといふことになると、能く御承知の方がどうも少いやうに思ひます、ですから飲酒の害といふものがどの位恐しいか、どんな實際

であるかといふことを最初に御話して、さうして此の害を除くには御婦人の力がどう關係があるかといふことに論及してみやうと思ひます。

　で最初に先づ此の酒の害と云ひますと、酒の害を説く前に、酒と云ふのは一體どういふものを指して云ふのか、といふことから申してみたい、今日普通酒と云ふのは米を原料として造つた所の酒、所謂日本酒を普通「酒」と斯う云うて居ります、他の種類のを指す時は「葡萄酒」とか「麥酒」とか別の名前を用ひるのが普通でありますが、私が茲に「酒」と申すのは此の日本酒だけを指すのではありませぬ、總て「アルコホル」を主な成分として居る所の飲料、是れを悉く酒と申すので、故に麥酒も酒、葡萄酒も酒、「ブランデー」等は勿論其の中でも強い酒であります、「アルコホル」を主な成分とする飲料を皆「酒」といふ名前の下に一括して其の害を御話する、言換へれば「アルコホル」の害を御話する、斯う申しても宜しい、酒と名は付いて居つても「アルコホル」の這入つて居ぬ酒は此の話の外になります、即ち甘酒の如き、酒といふ名前は付いて居りますが「アルコホル」を含んで居りませぬから酒とは申しませぬ、酒は酒だが「アルコホル」を含んで居ない所の酒、私の今申すのは「アルコホル」を主成分とする酒のことを御話するのであります。

　そこで酒即ち酒精といふものは、元來吾々人間の生活の上に必要な物であらうか不必要なものであらうか、之を第一に知る必要があります、是れが必要なものであるといふことならば其の樣に又考へなくちやなりませぬ、無暗に禁酒だとかいふことも申されぬ、けれども不必要なものであるといふことならば即ち酒は飲まぬでも濟む、夫れに害があるとすれば飲まないやうにするが宜しい、そこで必要物であるや否やといふ問題に就て申しますとです、酒は吾吾人類の生活上に必要の無いものである、酒を飲めば體が丈夫であるとか、酒を飲めば斯ういふ利益があるといふ何か爲になることがあれば是れは必要物

です、所が段々調べてみると酒は無い方がよい、無くて濟むもの、有つたがよいか無いがよいかと云へば無い方が吾々の健康を安全に保つ上に宜しい、故に先づ必要物といふことは申されない、不必要である、で衛生上から云へば何所までも無い方が宜しい、必要は決してない、夫れにも拘らず今日の實際に於ては、日本ばかりでなく世界中何所の國でも酒は必要物の如くになつて居る、日本では殊に御祭り、御儀式といふやうなことに酒が必要物になつて居る、歐羅巴でも宴會の時などには「シャンペン」をついで乾盃する、盃を擧げて健康を祝す、萬歲を唱へるといふやうなことは世界中何所でも宴會の席等に於ては必要物の一つに習慣上なつて居ります、是れは古來の習慣であつて利害の問題ではない、利害の上から云へば利益のないもので不必要物であるけれども、習慣の上では必要物であるかの如く見える、殊に日本では唯宴會の席で萬歲を唱へ盃を擧げるといふばかりでなく、極く重きを置く所の御祭又は御儀式といふやうな總て上下の儀式上に、酒がなければ御儀式が出來ぬ、斯ういふやうな有樣になつて居りますから、殊に日本では其の意味に於て必要物の性質を持つて居ります、けれども此所が大に研究を要する點で、此の儀式上必要であるといふことも、何か學問上の理由に基いて、斯ういふ利益が人類の生活上ある、利益あるから之を必要物とする、貴重品とする、といふのなら分つて居ります、所がさういふ理由が是れまでの所ないので、唯理由とするのは古來の儀式であるとか古來の習慣であるといふだけのことで、此の古來の習慣とか儀式とか云ふやうなことは、善し惡しの問題でなくして唯古來の仕來りといふだけのことであります、是れが一方害もなく益もないがといふものなら御儀式は御儀式で保存して差支ありませぬ、又非常に利益あることなら奬勵して永く保存する方が宜しい、古來の御儀式であつても習慣であつても之に思はぬ害が伴つて居る、斯ういふことであれば之を改正する必要があります、之を

改正せずに何時までも「是れは儀式である、是れは習慣である」といふやうなことによつて、人類の生活に有害なものを何時までも續けて居つたならば、是れは、世間の識者から何と評されるでありませう、内國人は暫く措いて外國人の目から見たら甚だ諒解に苦しむことゝ思ふ、世界の人が皆其の害を認める今日、米國などでは全國禁酒まで行ふ時代になつて、是れは儀式である故に避けられない、習慣がある故に變へられないといふ感情的理由によつて、充分止めなければならぬ學問上の道理のあるものを、夫れを無視して古來の習慣を何時までも保つといふことは、是れは何と評されるでありませう、日本人は頑固である、是れしきの事が分らぬか、斯う云うて譏られても何等之に對して辯解することの出來ぬやうなことに立到りはせぬかと思ふ、さういふ次第のものでありまして酒といふものは實際有害なものである、儀式や習慣は改めた方が國家の利益である、人類の爲めであるといふことであつたならば、其の形式を變へる必要がある、之を改正して害の無いものにするといふことは、今日の教育ある人に於て考へなければならぬことであらうと思ふ、之を考へず置けば他日非常な不利益が國家に生じて來る、其の事は後に御話申しますが、兎に角思ひも寄らぬ意外な害を招く、唯儀式習慣といふだけに拘泥して改める勇氣がなかつたら、他日大いに後悔せねばならぬ、未來の國民から現在の吾々は恨まれなければならぬ、何故斯う云ふことを早く改めて呉れなかつたかといふ愚痴を云はれるやうなことがあらうと思ふ、吾々此の事を知らなかつたならば夫れは致し方がないが、今日明かに有害なことを承知して居りながら之を云はずに居るといふことは、甚だ國民に對して——殊に未來の國民に對して不親切であります、夫れ故に今日は改めなければならぬ時勢になつて居るといふことを能く皆さんに呑込んで戴きたいのであります。

これで必要不必要の點から云へば不必要であると

いふことが分りましたが、先づどういふ害があるか、頻りに害があると云ふが一體どんな害があるか、是れは色々ありまして、今日其の全部を御話することは到底二時間や三時間で盡すことは出來ませぬ、其の中の一部分一二を擧げて他は推して御推察願ふことに致したいと思ひます、其の例としては色々ありますが、此の酒を飮むと色々な間違事が起る、喧嘩をする、犯罪をする、病氣になる、斯ういふ色々の害のあることは大體に於て何誰も凡そは御承知でありませうが、けれども其の實際を能く御承知にならぬから感じが薄いといふ譯である、又健康を害するといふ程でなくして既に現はれるのは精神上に現はれる所の害、卽ち酒飮んで喧嘩をする、亂暴をするといふ樣なことは、是れは身體の上には夫れ程の中毒、――夫れも中毒と云へば云はれますが、――先づ狹い意味の中毒といふほどではない、醉が醒めると常態に復する。其の程度であつても精神上には既に著しい影響がある、此の酒の上の出來事といふやうなものは、多く此の一時の飮酒の害である、夫れが精神の上に惡い働きをなし、其結果犯罪といふやうなことになつて現はれる、是れは精しい御話をすれば、何故に酒を飮めば犯罪が多いかといふことは詳細御話することが出來る、今日の學問上から云へば當然の結果である、酒飮んで喧嘩が多い犯罪が多いといふことは何にも不思議のことではない、「アルコホル」にはさういふ働きがあるのであります、さういふ働きのあるものを飮んでさういふ事が起るといふのは當然のことである、さういふ性質を持つて居る、故に或學者の云ふには酒には犯罪性がある、犯罪をする性質を持つて居る、酒飮んで犯罪するといふのは當り前である、しないといふのが寧ろ可怪しい、飮んで其の性質通り犯罪が澤山出るといふことは何にも不思議はない、當り前のことである、是れは酒が精神の上に働く工合がさういふ性質を持つて居るからであります、之を心理學の上から說明すれば充分說明がつくのであります、心理學上の事など申す

と大變長くなりますから精しいことは申しませぬが、酒飲めば氣分が浮々する、大變浮立つて來る、これが酒を飲む人には酒の效能といふ、どうも氣が鬱いで仕方がないから酒を飲む、物事が氣になつて仕方がないから苦を忘れる爲に酒を飲む、其の時には夫れが效能の樣であります、けれども一體心配であることを忘れるといふことが既に此の酒は麻痺藥である、酒は醉ふ、醉ふ故に忘れる、心配なことは心配するのが當り前である、其の心配を忘れて平氣で居るといふことは、一面から云へば夫れは既に酒が精神の働きを麻痺させる、鈍らせるといふことになる、心理學の上から云へば夫れは即ち精神の働きを鈍らせる、悲しく感ずる筈の事を悲しく感じない、夫れが既に一面から云へば酒の利益であると同時に一面から云へば害である、心配を忘れて都合の好い時には利益であるが、忘れて都合の惡い事がある、親が病氣である、早く歸つて見舞ふのが當然であるのに酒を飲んで居る故につひ親の病氣を見舞ふことも忘れて居る、其の時には忘れるのは害である、親の病氣を心配するのは當り前であるのに飲めば忘れてウカ〳〵して時間を費し、親を早く病牀に訪ふべき所を怠る、のみならず寢込んで了つて歸るのを忘れる。

　で此頃も斯う云ふ話がある、日本人が米國へ行つて居つて日本に歸つて結婚して新婦を伴れて米國へ歸る、さうして汽車へ乘る時に、其の人は非常に酒好きであるので、まだ加奈陀では酒の飲める時其所で飲めば飲めるが合衆國へ這入つては飲めない、斯ういふ所から好きな餘り「一寸酒を一杯飲んで行くお前一寸待つて居つてくれ時間までには必ず歸つて來る」と、新婦を汽車に殘して「バー」へ飲みに行く、夫れも時間通り歸つて來ればよいのですが、好きな酒ですから行つたら知つて居る人もあり、話して彼れ是れして居るうちに汽車は出てしまふ、飲みに行つた夫の方は飲んでウカ〳〵して居つたから汽車は發車した、新婦の方はまだ英語を一つも知らない、英

語を一つも知らない新婦が一人汽車に殘されて汽車は走り出してしまふ、手頼りにして居る夫は後に殘つて新婦は非常に困つた、斯う云ふ事があります、是れは卽ち酒を飲んで時間を忘れてウカ〳〵して、卽ち精神が夫れだけ油斷を生ずる結果で、英語も出來ない新婦を一人汽車に乘せて置くやうなことになる、是れなどは宜くない、犯罪には關係ありませぬけれども、犯罪等もそんな工合にして忘れて惡い事を忘れる、忘れるばかりでなく酒飲むと大變腹立つて來る、怒り易くなるから些細な事に腹を立てそれが喧嘩の原因亂暴の原因になる、常ならば謹しむべき所を謹しむことを忘れ、怒つてならぬ場合に怒りを發する、是れが酒の上の犯罪が多い原因であります、醉つて騷ぐと巡査が制する、其の巡査に向つて惡口する、そこで官吏侮辱といふ樣な罪に問はれる、斯う云ふ事は一時の飲酒が精神を一寸狂はする爲に生ずるのである、之に就いて面白く感じたのは、今花時でありまして飛鳥山なり荒川へは花見客が澤山出て盛に酒を飲んで騷いで居る時節であります、夫れが面白いことには飛鳥山へ此の東京の禁酒會の人が、花時には醉倒れが巡査の厄介になるといふのが澤山ある、どうか其の世話をしてやりたいといふので飛鳥山の一部に天幕を張つて醉倒れの人を集めて世話をしてやるといふ事を始めた、一週間ばかり前から始めた所が此の催しが非常な大當り、昨日は一日百人以上此處で世話をした、每日何十人といつてあるが昨日は日曜でしたから百人以上も其處の御厄介になつた、所が其の結果が面白い、非常に有益である、何時もは喧嘩が非常に多いのに今年の花見には飛鳥山に喧嘩が少い、どういふ譯かと云ふと今の救護班が關係がある、といふのは醉倒れが出來る直ぐ救護班から擔架を持つて運びに行く、醉倒れを載せて運ばうとする、さうすると醉うて倒れて居つても擔架に載つけられることは、精神の夫れほど醉潰れて居らぬ者は餘程嫌やなものと見え、載つけやうとすると早々にして逃げ出す樣に行つてしま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ふ、喧嘩も何もせんでもう逃げて歸る、だから喧嘩の起る種がない、併し又救はれて救護所に來るものも澤山ある、それから一面には花見に行つた連中が、醉倒れが出來ると持餘すので、直ぐ擔架を持つて來て吳れと救護を求めて來る、すると看護婦が隨いて迎ひに來る、いつもだと巡査が叱りつける樣にやるから巡査に喰つて掛る、喧嘩が始まる、官吏侮辱といふ樣なことになる、併し看護婦が行つて優しく云ふと、醉潰れて居つても腹も立たぬ、のみならず非常に閉口する、救護所へ行けば無論醉倒れて居ますから寢込んでしまふ、靜かにして居つて叱りつけたり逆らつたりしないから喧嘩にもならない、少しは亂暴云ふても醉うて居る人間だと思ふから聞流して居りますので喧嘩にはならぬ、さう云ふ關係で今年ほど飛鳥山に喧嘩の少い年はない、是れは王子の警察署で意外な結果であると云ふて居る、唯救護するといふだけでなくお蔭で喧嘩が少い、是れが一つの救護の大なる利益である、又適當に手當をするから怪我するなどといふ事も少い、いつもはさう云ふ人間を無理に伴れて歸るといふことから、電車に乘る或は汽車に乘る時に電車が動いて居るのに乘らうとして踏外して怪我する、それが澤山あるのに今年は怪我人も少いといふのは、醉倒れが皆救護所に伴れて行かれて、電車でも汽車でも怪我する樣なヒヨロ〱して居る人は乘らうとしない、其の結果として怪我人は大變少ない、又王子の警察署はいつもさういふ人間を留置所に打込んで醒めるまで置くといふのが例であつたが、其の必要もない、警察が非常に閑暇であつた、第一に救護所を設けたのを喜んで居るのは警察、それから救護されるものがお互に害を蒙ることがない、救護されたのは醉が醒めると非常に閉口して平身低頭して其の禮を云ふて歸る樣な有樣で、適當に扱へば怪我人もなければ喧嘩もない、警察の厄介も少い、斯ういふ工合に行くのですが、それがさういふ工合に行かぬと巡査に惡口する、車から落ちて怪我する、是れは一時の害でありますから其の扱

ひ上の如何によつて如何に能く其の保護が出來るかといふことを試して禁酒會の人がやつた所が非常な效果があつた。

是れは附たりですが、詰り酒が精神上に害をなす、其の結果として犯罪が起る、其の犯罪が喧嘩位に止れば宜いが殺人犯といふ様な事まで生ずる、是れは一時の飲酒でもさういふことがある、此の不都合の起ることは學問上當然のことで何も不思議はない、さういふ犯罪を當然の結果とする様な酒を之を御目出たい物であるといふことが云へませうか、どう考へてもさういふ害あるものが御目出たいものだ—神様を祭るのに之を供へなければならぬと云ふ性質を持つて居るものではどうしてもない、けれども夫れを知らなければ昔からやつて來たからどうしても神様に奉げなければならぬ——水ではいかぬ、斯う云ふ感じがします、さう思ふのは是れは感情である、道理ではない、智慧を揮つて考へれば、さういふ犯罪を當然の結果とする様な酒を神様に奉げるのは間違である、吾々の智慧の足らなかつた結果である、過去は仕方がないとしてもさういふ誤解であると分つた以上改めなければならぬといふことは分らうと思ふ。

御祭りばかりでなく婚禮もさうである、婚禮の儀式にはどうしても酒がなければ儀式が整はぬ様に感じて居ります、併し酒なしに婚禮して居る所もあります、歐羅巴の婚禮は寺に行つて約束の指輪を取交して、神前で儀式をするだけで、別に酒はなくても婚禮が出來る、又日本でも寺院でなす所の婚禮には酒はない、それから近頃は民間に於ても酒を用ひず——酒といふ名前がないと物足らぬ感じがするから酒は酒だが酒でない酒——即ち甘酒——之を儀式用に用ひることが始められて居る、此の甘酒を儀式に使ふといふことは、是れまでも神を祭るのにも本當の清酒でなくて甘酒を使つて居る所が事實あるのです、昨年四月私は九州を旅行しまして、日向の國都萬驛といふ所にさういふ社があると聞きました

から、態々寄つて確めて來ましたが都萬驛に都萬神社といふ社がある、其の社は木花咲耶姫を祭つてある社で、此の祭典の儀式には酒を使ひませぬ、甘酒を使ふ、そして甘酒を使ふといふことはもう神代以來の事だと申し傳へて居る、木花咲耶姫が御在世の間には甘酒を造ることが上手で、自ら甘酒を造つて神を祭るにも之を奉げ又其の夫に當らせられる瓊々杵尊、此の御方も御夫婦共に酒は御用ひにならなかつた、故にやはり日向に三宅神社といふのがありますが、瓊々杵尊を祭つたのでありまして、此の神社でも神代以來今日まで祭神の儀式に酒を使はない、御夫婦ではありますが三宅神社都萬神社共に酒を用ひない、此の外にも未だ私は行つて見ませぬが京都府下にもさういふ社があると云ふ、富山縣にもあるといふことを聞いて居ります、是等は未だ都萬神社以外は行つて確めてみませぬ傳聞ですから間違あるかも知れませぬが、兎に角神代以來祭神の儀式は必ず酒がなければ出來ぬといふことなく、甘酒で祭つて居る神社が確にある。

　それから是れは私自身が調べたのではありませぬが、古い書物に甘酒の事があるさうです、昔は之を甘酒と云はずして天津香具酒、斯う稱へて居る、其の言葉が詰つて甘酒となつたと或人が申しました、語源が果してさうであるかどうか保證の限りでありませぬが、兎に角そんな工合に神を祭るにも甘酒を用ひる。

　又近頃民間の婚禮にも甘酒を儀式に使ふといふことが始まつて居ります、先達私は三々九度の式には列なりませぬでしたが後で披露の式に列なつて聞いたのでありますが、三島博士が令孃にお聟さんを貰つた、其の式には天津香具酒を以て儀式を擧げた、で斯う云ふことを三島君から私に御話がありました、貴下の御希望通り儀式に實行致しましたから一寸御話します、斯ういふことであつて宴會の席にも甘酒を皆に供したといふことがあります樣なことで、婚禮にも必ずしも酒がなければ儀式が擧がら

ぬといふことはない、さう云ふ式が既に始められて居る、又昔から神を祭るのにも、さういふ式が廣くは行はれて居らぬが或部分には神代以來として傳はつて居る、其の良い風を取つて弊害のある所の清酒を儀式用に供するといふことを廢めたら、何にも苦なしに改正が出來る、酒は無くとも儀式は擧げられる、さうすれば今申した花見の場所で亂暴するものが少い、怪我人が少いと同じ様に、三々九度の酒やお神酒が間接になす害を避けることが出來る、茲に一寸御斷りしておくのは、或人は「ナニ御儀式に酒をそんなに餘計飲みはせぬ、三々九度の盃を遣り取りした所で酔拂つて潰れる様なことはない、儀式は儀式として置くがよい、神様を祭る御儀式は昔から傳つたのだから其の儘行るがよい、何も害があるといふことはない」、斯う云ふのは一寸見方が當を得ないと思ふ、さう云ふ人の害のないと云ふのは、さういふ儀式の際に戴く所の御神酒といふものは酔拂ふ程に飲まないからさう八釜しく云はぬでも宜いではないか、といふのだが夫れはさうに違ひない、絶對に惡いものだといふ事は是れは又言へないのです、絶對に毒であるといふものは酒に限りませぬ何んな物でも絶對に毒物といふはない、世の中にない、毒であるとて絶對毒だといふ意味ではない、極く少し——ほんの少し飲んだ位で中毒する、そんなことは無論ありませぬ、夫れはさういふことを許する人の云ふ通り決して間違つて居りませぬ、けれども茲に注意を要するのは、儀式に使ふといふことになれば、儀式といふものは人の尊敬するものである、其の御目出度い儀式の材料になるものは自ら人が尊敬する、從て酒も常にさういふ尊敬する所の儀式に使ふのであるから、酒は貴いものである、結構なものである、斯ういふ風に思ふから何か御目出度い事があれば先づ御祝に一杯、斯う云ふことが自ら生じて來る、其の時其の時の分量は少いけれども是れが爲に酒を飲む習慣を養成する、是れが原因になる、此所が最も酒の害を豫防する上に注意を要する所であり

ます、一體此の酒呑といふものは生來酒呑であるといふ人は世の中に一人もない、生來酒といふものが美味しいといふた人は一人もない、是れまで私は隨分注意して酒を飲む人に就て聞いてみたが、まだ一人もさういふ人に出會はない、最初の一口は美味くなかつた、いやに辛いものであつた、其のいやに辛いものがどうして好きになつたかといふと、始めはいやに辛かつたが親が御神酒だから飲めと云ふ、一寸一口飲んで口に入れた時吐出したかつた、けれども吐出しては親に叱かられる、或は、意氣地がない夫れが飲めない樣では俺の子供ではないといふ樣なことを云つて親に叱られる、どうも意氣地なしと云はれるも殘念である、いやに辛いけれどもグイ飲みして其の時は苦しかつた、併し二度飲三度飲み度重なると段々馴れて、初めはいやに辛いと思つた其の辛い所に美味が出て來る、遂に好きになつて今日止めやうと思つても止められない、斯ういふ工合に習慣が飲酒の性質を養ふ、酒呑といふのは天性ではなくして第二の天性である、作り出すのである、子供の間に是れは御神酒だ、是れは何だと云うて、御儀式だ御祝だと酒を勸める、其の分量其の物に於ては中毒するほどのものでは無論ありませぬ、けれども飲酒の習慣を養成する、其の害は今度、禁酒が必要である——酒害豫防が必要であると云つても却々實行が出來ぬ樣に原を作るのである、此所に氣が付いたならば、御神酒も其の時には御目出度いと思つて飲ませるのであるが、さういふ害のあることを知つたならば、子弟を過る第一歩を此所に作るのでありますから、さう云ふものを子供に進めて飲ませねばならぬか考へて見れば、何誰が御考へになつても「夫れでも飲ませよ」といふ御考は起らぬだらうと思ふ、此所の關係を能く解釋して、一口の酒、一滴の酒も子供に飲ませるといふことは、他日子供を酒害に陷れる原因の作り始めである、惡い習慣に染む所の第一歩、習慣養成の第一歩である、斯う考へなければならぬ、さう考へたならば可愛い子や孫に、「夫れで

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

も御儀式だから飲め」といふことは、情としても云へないことであらうと思ふ、私が此の酒の事で今後御話しやうといふことは、此の關係を世の中の人に能く了解して戴きたいのであります、此の關係が分れば儀式だから飲め、御祝だから飲め、斯ういふことは無論止むであらうと思ふ。

併しながら習慣のついて居る人は其所が此の酒です、卽ち酒は一つの魔物水である、毒であるのみならず一つの魔物だと云ふ、習慣がつくと惡いと知りつゝも飲む、惡いと知りつゝ人に飲ませる、惡いと知つて居つても口に惡いとは云へない、「百藥の長」などゝ良いことばかり云ふ、良心を欺いて斯う云ふ工合になつて來る、此の水から良心を欺く、第二の天性による酒に捉はれて居るからのことである。

今度は酒を飲むと精神上だけでなく體にも害がある、何ういふ工合に害があるか、此の理窟も精しく述れば理窟が分つて居りますが、此の酒の害の爲に腦が惡くなつた、心臓が惡くなつた、肝臓が惡くなつた、腎臓が惡くなつた、といふ樣に色々の事に害が來る、酒を飲む人は「身體が弱いから丈夫にする爲に滋養物として酒を飲む、少し宛每晩飲んだ方がよいと云つてよく實行して居る人がある、或は胃が惡いから胃を快くする爲に飲むとか、色々理由を云うて居られますけれども、是れは多くは目的と結果と相反して居ることになるのであります、胃が惡いから胃を快くする爲に飲むといふ人は、却て飲むが故に胃を惡くする、體が弱い、どうも肺病かも知れぬ、滋養物として酒を飲む、斯う云うて飲む人が飲むが故に却て肺病が進む、酒呑に結核病の多いのはさう云ふ譯である、槪して此の養生の爲めと云うて飲む酒が其の適度を失ひ、適度に飲むといふことは餘程六ケしいことである、其の適度を失へば藥の積りの酒が害になる、其の害が效能よりも多くない、といふのが事實であります、如何なる病氣と雖も、酒呑の方に二倍或は三倍どういふ病氣でも多い、胃病、腸の病氣といふものが殊に酒呑に多い、全く目的と

結果と違ふことになる、藥の積りで害を招く、其の結果として心臟が惡くなる、肝臟も惡くなる、腎臟も惡くなる、飲まなければさう云ふ病氣に罹らぬのに飲んだ爲に早く病氣になる、年を取れば心臟が惡くなることも腎臟が惡くなることも有り勝ちだが、飲まなければ餘程高齡に達するまで病氣にならぬものを、飲むと酒に促されて早く病氣になる、是れは酒飲む人は飲んで居るうちは元氣があるが一旦病氣になると病氣負けがする、從て病氣の治りも惡い、治療に手間を取る、のみならず比較してみると飲まぬ人より早死をする、病氣に餘計罹り罹つた以上治りが遲い、早く死亡する、斯ういふ結果を生ずるのであります、夫れは統計表を作つて見ますと爭ふことの出來ない事實であります、色々の統計によつて證明が出來て居ります。

此所に三つの模型を持つて參りましたが、此の中是れは腎臟です、酒を飲まぬ健康な人のが是れで、酒を飲んで少し過ぎるとそろ〱惡くなつて最初は大きくなる、常には餘りないのに脂肪が餘計になる、又腫れたり色々して不斷より大きくなる、是れが「アルコホル」中毒の始めであります、夫れがもう一歩進むと斯ういふ工合に小さくなる、常には滑つこいものがザラ〱して凸凹が多くなる、觸つてみても此方は軟かであるのに惡い方は硬い、斯ういふ工合になつたのは萎縮腎と申して酒飲んで腎臟が惡くなつたのである、先づ斯ういふ工合に當り前の働きが出來ぬ樣になつて、水氣が來るといふ樣な腎臟病に相當な症狀が現はれ、遂に死亡に至る、大酒呑みで腎臟病で死ぬ人の最後の腎臟は斯ういふ工合である、初めに斯ういふ風に大きくなり、それから小さくなり遂に死亡する、斯う云ふ工合に是れは腎臟丈けですけれども心臟もさういふ工合で、脂肪が大變餘計に出來て大きくなる、少し歩いたりすると息がきれる、腦が惡くなる、記憶も惡くなる、精神病も出來る。

斯ういふ工合に體が惡くなることも「アルコホル」の働きで、是れが酒を飲む當人の蒙る害、卽ち自業

自得で傍ら飲んで傍ら其の害を蒙るのでありますから、夫れだけに止まれば自業自得で、酒を飲めば美味いとか酔つた氣持が好いとかいふ樂しみがある、其の爲に命を縮めても自分で招いたのであるから已むを得ぬ、諦めてもよい、けれども諦められないのは自分の招く害だけでなくして子孫に其の害を傳へる、本人は飲んで其の時一場の愉快を得るのだから、其の結果として命を縮めるといふのも自業自得です、併し其の子供は何等愉快を覺えるといふこともない、而かも子供は害を受ける、其の子供に及ぼす害も統計表等で御話すれば澤山ありますが、時間がないから略しますが、其の中一つ、是れは方々で話の時に使ひますから御覽になつた方があるかも知れませぬが、此の表はスイッツルの醫師で、統計の材料になつたものゝ家庭の狀態、親子の健康の樣子を能く知つて居るもの、餘り多くをするより確實の材料に據つて知つた方が參考になりますから、飲酒家と節酒家と禁酒家と各〻十家族を選んで、其子供に就てどういふ影響があるか、斯ういふことを調べたのであります、さうすると先づ健康な子供が何方にあるか、不健康な子供が何方に多いかといふと、大酒家、不節酒家――節酒の出來ない時々不規則に飲む人、第三が節酒家――飲めば飲めるけれども先づ節酒を守つて居る人、夫れから酒を飲まない人、斯う分けて、此の子供の黑い線が害のない健康な子供、赤い線が害のある子供であります、大酒呑の子供には健康者が少くてさうして不健康な子供の方が多い、夫れから酒の量が減るに從つて健康な子供が多くなつて不健康な子供が少くなる、節酒家になるとずつと逆になつて居る、酒を飲まぬものには害を蒙らないものが多い、飲んだ方の側には害を蒙つたものが多い、斯ういふ工合に其の節酒と、節酒でないのと、大酒家との違があります、先づ第一に健康な子供が節酒家の方に多い、大酒家の方に少い、不健康のものが――或は不具者の樣なものが、量が減るに從つて多いことは多いけれども大酒家ほどではな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

い、死亡、是れがやはり酒を餘計飲む方に多く飲まない方に少い、斯ういふことが能く表はれて居る、夫れから又其の父親が酒を飲む飲まぬによつて乳の出方が違ふ、父親が大酒飲みだと、母親は酒を飲まぬ健康な母親で、乳が能く出て子供は自分の乳で育つた、さういふ母親であつたにも拘らず父親が酒飲むと、娘の健康の上には一寸見た所では何等の影響がないけれども乳が出ない、即ち娘は子を産んでも自分の乳で自分の子を育てることが出來ない、斯ういふ樣な結果になつて居る、大酒家と節酒家と飲まない人、斯う分けて見ますと、大酒家の娘で乳の出ないの――親には出たが娘には出ない大酒家に非常に多い、此所に黑く表してある――即ち親通りに出たといふのがありますけれども非常に少い、不規則に飲む――大酒家といふのではないけれども不規則に飲む、是れは親通りに乳が出るといふのが稍ゝ增して居るけれどもまだ少い、一番乳の出ないものゝあるのが大酒家で節酒家は乳の出るものが多くなる、酒を飲まないと反對になつて乳の出るものが大變多くなつて出ないものが少い、孫を育てるのに親の乳で育てることが出來る、斯ういふ風に飲酒といふことは飲む本人が影響を蒙るばかりでなく、子供にも孫にも影響を及ぼす、孫の乳がない爲に牛乳で育てる、其の爲に腸を惡くする、孫までお祖父さんの酒飲の爲に影響を蒙る、斯ういふことになる、酒の子孫に及ぼす害といふものは實に恐るべきものがあるのであります。

是れは唯乳が出ないばかりではない、先づ學校に行つて出來の惡い低能兒或は白痴と云ふ樣な極く薄馬鹿のもの、或は神經病、或は「ヒステリー」とか、神經衰弱、癲癇、神經の病氣、或は精神の病氣、病氣といふ程でなくても妙な調子外れの奇人、變人、さういふものが酒飲の子供に出來る、夫れは精神上の變質と云ひまして、精神が惡い方に變る、性質が變るから變質である、又精神に變りがなくても身體の上で弱い、肺病にも罹り易い、齲齒、是れも酒飲の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

子供に多い、色々の病氣に罹り易い、乳が出ない、代に酒飮が續けば、養子制度で家は繼げるが血統は絶える、子供の育ちも惡し、子供の出來方も惡い、流産も多くなる、斯ういふことから又孫が育つても病的のものであるし又死亡が多い、さういふ惡い影響を子孫に及ぼします。

其の事は最も一般の人に注意しなければならないことである、そして其の習慣を作り出す原因は御神酒だとか、御祭だとか御祝だとか云ふ時、「まあ一杯飮め、御目出度いから一杯飮め」、是れが習慣になつて緒を出し、段々重なると飮みたい／＼で酒を好む所の天性になる、其の天性の起りは自ら制することが出來なくて子孫にまで影響を及ぼす結果になるのである、之を根本から防ぐことをしなければならぬ、第二の天性が生じて惡いことを知りつゝ飮む人に「酒を止せ、禁酒しろ」と勸めた所が却々止めるものではない、けれども子供の時分、好きだと云ふ樣にならぬ前——酒はいやに辛いものだ、僕は嫌ひだ、斯う云ふ時、其の癖を毀さぬやうに、僕は嫌ひだといふことを保護して、御神酒や屠蘇で味を覺えさせぬやうにすることが必要である、そして是れは何ういふ人に最も出來易いか、何ういふ人の責任かといふと、是れは御婦人の力に俟たなければならぬ、婦人が子供を敎育するに、自分の子にしても他人の子にしても、子供を扱ふ際に御神酒なんと云つて一口も一滴も飮ませぬやうに、飮んではいけません、御盃を戴いておくに止めて飮んではいけませぬ、御神酒だから一寸一口戴いておけと進める人もありますが是れは間違です、一寸一口がいけない、子供には決して此の一口を云はず唯戴いておくことに止めさせなければならない、尚ほ進んでは御神酒の內容を改善して「アルコホル」を含んで居らぬのにして、夫れを飮ませる儀式を急に止めよと云ふのではないが、害ある所を改正するに努めなければならぬ、斯ういふことは婦人の力に俟たなければ本當の改善といふことは出來ませぬ、習慣のついて居る年寄り等

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は「少しばかり構ふものか飲ませよ」と云ふ、併し是れは實行してはいかぬ、何所までも飲ませぬやうに、其他總ての機會に於て子供に酒を飲まさぬやうに努めるといふことは、是れは婦人の力に俟つ所であります、婦人がさういふ場合に於て大いに子供の禁酒生活を助けるのに便宜な機會があるのであります、今日癖のついて居らぬ未來の國民――未來の國民だけは確に酒を飲みたいといふ癖のついて居らぬ國民であります、さういふ國民が段々大きくなつて來れば、三十年五十年の後に至れば日本全國はさういふ國民を以て充され、別に禁酒令等敷かずとも自覺的に婦人がさういふ工合に子供を敎育し指導すれば自ら禁酒國になるのであります、唯〻法律さへ出來ればよい、敎育や實際の事に重きをおかずして唯法律だけ作りたがつて居るといふのは、是れは前後を誤つたやり方である、未成年禁酒法を作るといふことは惡いことではない、如何なる說も云ふことをきかぬものもありますから飲んではならぬといふことも必要でありますけれども、普通の子供なら、女親が云うて聞かせる、或は學校の先生がよく云うて聞かせれば、其の云ふことを聞き分けてさういふことならば僕は飲まない、僕は大きくなつても酒は飲まない、僕は偉い人になるのだから飲みませぬ、斯う云ふ考になつて、子供の時の考といふものは非常に强いもので、諺にも「三つ兒の魂百までも」と云つて、是れは兒童心理の上の爭ふべからざる名言である、此の諺を活用して、子供の時から酒は惡いものだ飲みますまい、飲まぬ、斯ういふ誓をさせれば飲酒取締法などゝいふものはなくても自ら酒を飲まぬことになる、さういふ決心から來た自働の禁酒であれば確かである、目の前に酒を置いても飲む氣遣ひはない、法律で禁じたゞけでは人が見て居なければ飲む、今日の亞米利加などでも禁酒になつても癖のついた人はやはり飲む、內所で飲んで居る、酒が無くなれば飛行機で運んで來て飲むといふことまでやる、夫れでも飲めなければ「メチールアルコホル」を飲む、「メ

チールアルコホル」といふのは普通の「アルコホル」より二倍も三倍も害がある、そんなことを知らずに飲んで中毒する、さういふのは習慣がついて習慣に捉はれて居るからである、斯ういふ有樣で何でもよい飲みたい、此の弊に陷ることを防ぐのは御婦人です。

御婦人は國民全體の中で、日本國民が六千萬ある其の半分として三千萬御婦人である、兎に角此の國民の半數を占めて居る所の婦人が其の氣になれば、法律の力よりも強い、酒の害を防ぐ——假令禁酒といふまでに行かずとも酒の害を防ぐことは出來ます、夫れ故私は此の日本を絕對禁酒は容易でないとしても、酒の爲に蒙る害——酒害の豫防のよく行はれて居る國にするのが必要である、さうするにはどうしても癖のついて居らぬ所の子供、及び之を敎養する所の婦人の力、此の二つに依つて本當に有效に達することが出來ると思ふ、法律も必要ですが其の次です、其の缺けて居る所を補ふのには必要ですが法律の力のみで目的を達しやうとしたら是れは前後を誤つて居る考だと思ふ、故に私は此の酒害を豫防するのは特に御婦人の力に依賴したいと思ひます、で今後も此事を盛に主張する積りであります。

此主張は國民全體をして、此表に在るやうな害から未來の國民を救ふことが出來る、未來の國民を濟ふと云ふことは國家の將來に取つて非常に必要な事で、例へば米國の如く禁酒が既に行はれて居る國は此害から皆免がれる、さう云ふ國とお神酒だお祝ひだと平氣で飲んで居る國民或は其子孫と未來に國家的競爭すれば、其時には何方が負けるかと言へば健康な子孫を有して居る國の方が、酒の害を被つて低能兒や神經病、肺病、いろ／＼の者の多い弱い國民は即ち體格に於ても、健康に於ても劣等の國と言はざるを得ない、如何に威張つても是は口で威張つては駄目、事實、實行しなければならぬ、故に酒を飲續ける國は劣等國、早く此事を悟つて御儀式でも何でも改むべきは改めて酒の害から免かれば其國の子孫

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は永遠に健全、榮える、自然に國と國との競爭に於て勝つて行く強い者が勝ち、弱い者が敗ける、是ほどうしても爭ふべからざることである、優勝劣敗、優者が勝ち、劣者が敗れる、それは動かすことが出來ない、うか〳〵酒を飲んで行けば未來の國民をして劣者とする、早く此害から救へば未來の國民をして強者と爲る、此點に於て酒を唯飲む人、自ら飲む害ばかりでなく、國家の將來に大影響を與へる、大不利を與へる、早く禁ずれば大利益を與へる、不幸か禍か此決心一つに在る、願くは諸君の共同一致、擧國一致の力に依て、早く日本を此禍から濟ふやうに六ケしいやうだけれども兒童と婦人全體とが一致團結すれば老人は飲んで居つても三十年五十年の後には確かに健全な國になります、私は何うかさう云ふやうになつて欲しいと思つて、是から一つ汎く方々に行つて話さうと思つて居ります、今日は幸に此席に於て、此話を爲るの機會を御與へ下さつたのは大變に私に於て悅ばしい、お招き下さつた會のお方に向つて其御好意を謝し、今日お聽き下さつた方は、何うか此意味で、國家の爲め、子孫の爲めにお盡しを願ひます、是が卽ち國家に忠なる所以、君に忠なる所以、忠君と謂へば君の馬前に立つて斃れでもしなければ忠義でないやうに考へましたが、さうでない、御婦人は斯う云ふ遠き國家の未來に影響のある問題に意を注いで、國家の此害を除くことにお努め下さる、卽ち子孫に酒を飲まさぬやうにお努め下さる、これが卽ち國家に忠なる所以、斯うなるのであります、何うかさう云ふお心持で此實現に意をお用ひ下さらむことを特に私は皆さんに御依賴致します。

甚だ下手な長談議をお聽苦しいことでおありでせうと思ひます、又下手な所、お聽濟になつて誠心の在る處、此處を御記憶になつて實現あられむことを希望致します。

叢談

睡眠の話

醫學士　福田得志

睡眠は吾々人間の生活に一日も缺ぐことの出來ないものであります。吾々は、唯一晩でも睡眠が足りなかつたり、又は徹夜をしたり致しますと、すぐその翌日の仕事に支障を來します。啻に精神及び身體の能率が減るばかりでなく、そんなときには美味しい物を喰べても美味しくなく、面白い事も見ても一向面白く覺えませぬ。この頃のやうな短夜の季節には、殊に睡眠不足の不愉快な感じを經驗することが度々あります。夏の夕の涼風の心地良さに、散歩や雜談に少し夜更かしをしますと、假睡ろむともなくもう夜が明けてしまひます。そんなときには、御飯も不味く、一日中嫌な氣持がしますが、若しこの時に一頃の午睡が許さるれば、宛然生れ返つたやうに生々した心持ちになれませう。これで見ましても、睡眠が吾人の生活に如何に大切であるかと云ふことが判ります。こゝに面白い實例がございます。それは、英吉利の海軍が阿弗利加のナイル河で戰つたときのことでありますが、彼等は數日の間晝夜兼行不眠不休で働かねばならぬ狀態にありました。然るに、乘組員の中には、終に戰鬪の最中にも拘はらず、甲板の上で眠りこけて居たものがありました。何時自分の命を失なふか判らない戰鬪の最中であります、彼等は如何にもして勇しく戰ひたかつたに違ひありませぬ。然し、もうその時には、睡眠は不可抗力を以て襲ひ來つたのでありませう。

又、或る時は軍艦の艦長が、戰鬪半ばに眠つてゐた話もあります。艦長の居る所から六尺と距れない所で、大砲は絕えず發砲されてゐたのでありますが、

艦長は、それにも拘はらず、二時間と云ふもの悉皆熟睡して、全く大砲の音を聴かなかつたと云ふことであります。

軍隊では、強行軍の後など、兵卒が眠りながら行軍してゐることは、屢〻見る所ださうであります。元より、かくの如き眠りは甚だ淺いもので、一寸のことで目は醒めますけれども、兵卒は實に行軍と睡眠とを同時にやつてゐるのであります。

かくの如く、命懸けの戰鬪の最中で眠りに落ち、又は上官の命令を己が命よりも貴しとして居る軍隊が夢中の行軍をやると云ふことは、睡眠が吾々の生活に如何に大切であつて、若し一定の期間不眠であつたときには、睡眠はもう不可抗力の強い勢で襲ひ來ることを知るでありませう。然らば、睡眠は何故そんなに必要なことでありませうか。この問に答ふる前に、吾々は睡眠の生理を考ふる必要があります。判り易く申しますと、睡眠は腦髓殊に大腦の安息であります。吾々が目醒めて居る間は、腦髓は働いて居り、腦髓が疲勞して安息を要求するときに、吾々は睡氣を催ほすのであります。

すべての器官はこれを用ふれば疲勞し、疲勞すれば安息を要します。例へば、自分の身體に就いて考へても、吾々の勞働には一定の際限がありまして、それを超ゆると吾々は疲勞を覺え、更にそれ以上は働くことが出來ませぬ。若しそれを無理に働かせますならば、必ず身體を害なふものであります。腦髓も亦この通りでありまして、疲勞したものを無理に働かせますと、その作用の障碍を來すものであります。不眠或は睡眠不足の後に、頭が重かつたり、考へが朦朧としたり、計算を間違へたり、或は氣分が勝れなかつたりするのは、これ輕度も而も一過性の腦障碍に外ならないのであります。それで、吾々は、腦髓の作用を健全にし、人類に特有である大腦の高等なる官能を充分に發揮せしむるには、如何しても睡眠を要するのであります。

吾々の身體の中で、最も貴重な腦髓を保護するた

めに自然は睡眠を與へたのであります。故に、一定期間不眠が續きますと、今度は不可抗力で睡魔が襲ひ來るのでありまして、これは人間の不攝生に對する自然の制御であります。然し、吾々の日常生活ではかくの如き、過度の不眠及び努力を繼續することなく、適度の努力と適度の睡眠とを取り交せて、腦の攝生を守り、益々能率の増進を謀らねばなりませぬ。

一般に申しますと、**能率の高い人はよく眠る人であります**。瑞典國ストックホルム市の或る醫師の檢べた所に據りますと、睡眠の充分でない兒童に病氣に罹るものが多く、睡眠の充分な兒童に健康なものが多いさうでありますが、これは世界各國共通の事實でありませう。小學校などで、尋ねて見ますと、一番成績の佳い兒童は、夜よく眠る兒童であります。

醫者は、重性患者がよく眠つてゐる時には、敢へて診察しやうとはしませぬ、又わざ〱目を醒まさして服藥せしめよ、とは看護婦に命令しませぬ。これは、患者に取つては最も大切な醫者の診察よりも、或は醫藥よりも睡眠の方がはるかに貴いものであることを知つてゐるからであります。

適當なる睡眠時間は各人に依りて違ひますから、一概には言へませぬが、一般に小兒は大人よりも多く、虚弱者は強健者よりも多く眠ることを要します。今小兒の年齡によりて、必要なる時間を示しますと

四歲の小兒は十二時間位
七歲の小兒は十一時間位
八歲及び九歲の小兒は十時間半位
十歲及び十一歲の小兒は十時間位
十二歲の小兒は九時間位

づゝ睡眠する必要があります。そして健康なる大人は七時間乃至八時間眠れば充分であります。然しこの時間は、一般的に云つたのでありますから、これを實際に實行しようとする場合には、これで充分であるか、或は不足であるかを研究せねばなりませぬ。例へば、こゝに十歲の男の子があるとします。さう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

すると、この表では十時間の睡眠を取るべきであります。若し、この子が強壯であつて、毎朝時間にはよく目を醒して居るやうであれば、十時間はこの子に充分な睡眠時間であります。然し、若し毎朝まだ充分に目が醒めず尙ほ眠さうなときには、今少し夜早く寢かして睡眠時間を延ばすことが必要であります。かくの如き注意は殊に發育盛んな小兒を育てる上に大切であります。

一、小兒は出來るだけ澤山眠れよ

二、就牀及び起牀の時間を嚴守せよ

三、病氣でない限りは朝目が醒めたら直ぐ起きよ

この三則は、ジユウツト女史が小兒に向つて熱心に唱導した所のものであります。若し遠足或は運動等のために酷く疲れたるときには、早く寢かして、朝の起牀時間を遲らさないやうにした方が子供のためであります。

充分に腦髓を安息せしむるは、睡眠時間が充分であるばかりでなく、睡眠の性質が熟睡であらねばなりませぬ。淺い眠り或は夢現のやうな眠りは腦を安めるよりも却つて惑亂させることが多いやうであります。睡眠の時間及び深淺は互に關係が深いもので、一般に眠りは就眠後三十分乃至一時間、一時間半が一番深くそれより段々淺くなるものでありまして、六時間以上續けて眠つた時には後の時間の眠りは極く淺表なものであります。吾々は能率を增進するためには、なるだけ短かい時間の中に、なるだけ多量の睡眠を取る習慣をつけねばなりませぬ。亞米利加のバークレーと云ふ大尉は、一千時間に一千哩の道程を蹈破した徒步旅行の猛者でありますが、この人は一瞬をも空しくせず、横はれば直ちに眠り、醒むれば直ちに歩くと云ふ習慣を養つたと云ふことであります。牀に就くや否や直ちに眠り、目醒むる否や直ちに起きると云ふ習慣は、睡眠時間の勵行と共に最も大切なことであります。

睡眠を起す所の第一原因は、前にも申しました通

り、疲勞でありますが、尙ほその外に睡眠を催さしめる誘因があります。軒端落つる雨の音、或は木葉搖がす風の聲は春の宵、秋の夜に靜かなる眠りを誘ふものであります。又、赤坊は母の胸に子守歌を聽いて眠ります。かくの如く、すべて睡眠を誘ふものは變化の少ない單調な音の楷律でありまして、變化は安眠の妨げであります。故に、說敎の間居眠りをしてゐる善男のお爺さんは、說敎が濟むと、むつくりとその頭を擡げ、夜汽車で眠つてゐる客は汽車が停ると目を醒すのであります。或る水車屋の主人は、旱魃で水車が囘らなくなると、夜よく眠れないといつたことがあります。

單調なことは何でも睡氣を催させるものでありますから、興奮して眠られないやうなときには、吾々は色々單調なことを反復して眠らうと努力するものであります。例へば一から百まで徐々に數へて往て、又後戻りをするとか、或は或る詩歌の文句を幾遍となく反復する、或は又「眠れ」「眠れ」を反復する人があります。中には、ABC…の初めのAと最後Zとを取りその次に段々中の方へと取つて、AZBYCXDV…と云ふ具合に竝べて行ては又戾りして終に眠に落つると云ふ人もあります。私自身は、「何も思はない」「何も思はない」と云ふことを心の中で繰返へして就眠することの出來た經驗があります。すべてかういふ遣り方は、一寸馬鹿げた事のやうでありますが、時に非常に有效であることがあります。又、これは各〻の經驗でありますから、自分で一番好きなことを實行したが佳いと思ひます。是等のことで一度なり二度なり眠りつくことが出來ますと、そこには暗示と云ふものが手傳ひまして、もう何かお呪ひの文句を二言三言繰り返して居る中には直ぐに眠り込むやうになります。

右のやうな寢就かれないと云ふ位な程度の不眠は非常に輕いもので、一寸した努力で治るものでありますが、それが進んで來ると、不眠といふ一つの症狀を呈して來るのでありますから、その時には醫者

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の診察を受けて、充分によく眠り、毎朝清新な心持で起上られるやうに努力せねばなりませぬ。

外科叢談（承前）

ドクトル メヂチー子　吉川春次郎

二、創傷は何うして治るか

今身體の或部分に一つの創が出來たとする、此創の運命は何うなりますか。此創は吾々の組織を構成して居る細胞の力に依つて、自ら治らうと致します。誠に自然の妙機は至れり盡せりと申すの他はありません。

創は何うして治るか、之れに二種の別があります。其一つは創の兩縁が正しく密接して居る時に起るので、此場合は先づ創面から涌出する血液及び淋巴液が兩創縁の間で凝固し、恰も糊付けにしたやうに兩創縁を相粘著せしめます、而して後、相對向して居る兩創面の細胞が増殖し、且つ新しい血管が此内に出來て、終に完全に兩創面を接合せしむる事になります。斯樣に創の兩縁が直ちに相接著して治癒に就く事を、吾々は創が第一期癒合を營んだと申します。此、創の兩縁を接著せしむる爲めに新に出來た組織は、所謂瘢痕組織でありますが、斯く第一期癒合を營みました場合には、ほんの細い線狀の創痕を止むるのみで、創が淺く小さい時は、後に至つては殆んど全く其痕を止めない樣になります。

此樣な創の治り方は、最も都合の好い場合であつて、之れこそ創の理想的治癒と申すべきものであります。併しながら斯樣に工合良く治癒を營むには、一定の條件が必要であります。それは前申した通り、創が規則正しく、且つ其創縁と創縁とが相接著して居らなければならぬと云ふことであります。例へて申せば、極く鋭利な刃で出來た眞直な切創で、其場所が恰も皮膚の弛緩して居る部位であつて、創は出來たが創口が開かぬと云ふ狀態であるなれば、可成

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

り大きい深い創でも、兩創緣は其儘接著して居りますので、途中特別の故障の起らぬ限り、能く自ら第一期癒合を營みます。之れに反して工場機械に挾まれて出來た不規則な挫創であるとか、皮膚の一部分が剝ぎ取られた剝脫創と云ふ樣な創では、此樣な都合の好い治り方を遂げる事は出來ません。又創が規則正しくても、創緣と創緣とが接著して居らず、廣く口を開いて居る樣な場合であつては、到底第一期癒合を營む事は出來ないものであります。

それならば、今申した樣な不規則な創や、規則正しくしても大きく口を開いて居るやうな創は、何うして治癒に就くでせうか、此場合は露出して居る創面に於て、先づ肉芽なる組織が出來ます、これは創面の組織構成に與る細胞の增殖に依つて出來た新生細胞群でありまして、俗に創に肉が上つたと申すのは、此肉芽組織の發生した狀態を云ふのであります。偖て此樣な肉芽を以て被はれた創は、此後何うなりますか？。此肉芽なる組織は漸次其性狀が變つて、終に頑固なる瘢痕組織になるのであります。肉芽の瘢痕化すると同時に、創の周緣からは表皮の細胞が增殖して創面を被ふ事になりますが、健康皮膚とは似てもつかぬ狀態となるのであります。斯樣な創の治り方は、之れを肉芽治癒又は第二期癒合と名づけられて居ります。此場合に於ては創の治癒は非常に長びき、治つた後は醜い瘢痕を結びますので、第一期癒合を營んだ場合とは、全く其趣を異にして居ります。

斯樣な次第で、創の治り方に二種ある事は判りました。而して此區別の起るのは、創の本來の性狀に依る事は前述の通りであります。即ち第一期癒合を營むに必要な條件を具備して居ると否とに依つて運命が別れるのである。第一期癒合を營むべき條件を備へて居らなければ、肉芽治癒を致すの他はないのであります。併し此創の運命は人爲的に左右する事は出來ぬものであるか。此仕事がそもそも外科醫術の發程であります。新しい創傷を適當に手當する事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が、外科醫の作業の第一歩であります。つまり肉芽治癒を營まねばならぬ様な狀態にある創を、第一期癒合を營み得る様な狀態に變へるのである。それにはどんな事をするか、卽ち創緣と創緣とが離れて居つて創口が開いて居るなれば、之れを接著せしむる方法を講ずるのである、之れが創傷の縫合であります。若し又不規則な創であつて、直接に創緣を合せる事が出來ぬ狀態にあるなれば、先づ適宜の處置を加へて、之れを縫ひ合せ得る狀態となしたる後縫合致します。併しながら皮膚の缺損が大きい爲めに到底縫合する事が出來ぬとか、創が汚れて居る爲めに縫合しては却て不良の結果を來すと思はれると云ふような場合であれば、已むを得ず肉芽治癒を期する事になります。

創の治り方に二種ある事と、創傷に對する醫療の第一義は之れにて理解し得た事と思ひます。

此處で創傷治癒の事で尚一つ附け加へて置きたい事があります、それは擦過傷の治癒であります。擦過傷と申すのは、文字の通り擦り傷であります。力が皮膚の面に對して平行の方向に加はりますと、表皮の上層が剝ぎ取られて、淺い併し廣さある創を生ずる、之れが擦過傷であります。此創は創面から分泌する血液及び淋巴液の凝固物に依つて出來る痂皮で被はれ、此下で上皮細胞が新生して剝ぎ取られた部分を補塡し、短少時日の內に治癒に就くのであります、之れを痂皮下の創傷治癒と云ひます。

三、創の化膿とは

創傷治癒の種別及び創傷縫合の意義は、前段記した所で理解せられましたが、創傷の手當には更に重大なる問題があります、其一つは出血に對する處置で、一つは病原細菌＝黴菌＝の創傷內侵入であります。出血に就ては後日に讓り、只今は細菌侵入の問題に就て述ぶる事と致します。

或一の創があるとして、其創が本來第一期癒合を營み得る條件を備ふるか、又は適當なる處置＝縫合＝に依つて第一期癒合を營むべき狀態の下に置か

れたとする。斯くの如き創は如何なる場合にても美事に第一期癒合を營んで、一週間前後で完全な治癒を得るであらうか。否！、そう簡單には參りません。何故であるか、之れが問題の化膿である。創傷の化膿とは、創傷内に細菌が侵入して此處に發育繁殖し、組織を破壞し膿汁を漏す狀態を云ふのであります。化膿の原因を爲す細菌は樣々ありますが、最も普通なのは葡萄狀釀膿球菌と連鎖狀釀膿球菌とであります。是等の病原菌が創傷に侵入して組織を襲す事になりますと、第一期癒合に依る創傷治機は根柢から覆され、創緣及び創圍の充血腫脹を來し、相接觸して其儘癒合すべき筈の兩創緣は癒合を營まず、却て間隙を生じて、其處から膿汁を出すようになります。

斯くの如き場合には、吾々の身體に於ては、創傷治癒を開始するより前に、先づ外襲者なる細菌と戰つて之れを驅逐しなければならぬ。而して組織が細菌に打ち勝ち、細菌は其繁殖を止め、漸次其數を減じ、終に絕滅するに及んで、創は肉芽治癒を營み、瘢痕を結んで治癒する事になるのであります。でありますから、既に一度化膿を惹起したる場合は創傷の本來の性狀が如何に良くあつても、必ず肉芽治癒に終る事になります。

斯かる次第故、創傷一度化膿すれば、治癒の遷延する事は申すまでもない、幸に一期癒合を營む場合には、七日か十日で全治すべき創も、化膿したが爲めに、創口は哆開し、長い間膿汁を漏し。數週數十日を要して初めて治癒に就くと云ふような事になり、其上治つた瘢痕は大きく醜く貽り、治癒經過の長短なり、後貽する瘢痕の狀態なり、第一期癒合を遂げた場合とは、到底比べにはならぬのであります。併しながら之れだけならばまだ〳〵我慢も出來る、日數が延びる、創痕が大きくなると云ふだけなれば、諦めもつかぬでないが、細菌の侵襲は必ずしも創傷組織其者に止まるのではない、幸に組織が容易く細菌に打ち勝てば、創傷治癒に障碍を蒙るだけで濟みますが、不幸にして細菌の侵襲力が一層增大であり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

とすれば、其結末は何うなるか。先づ細菌は創傷周圍の組織に向て進擊する、卽ち所謂蜂窠織炎「フレグモーネ」を起す。更に淋巴管內に進んで淋巴腺に及び、淋巴管炎、淋巴腺炎を惹き起す。之れ位の事なればまだ〳〵である、場合によつては貴要臟器に侵入して、肺炎、腦膜炎、腎臟炎等を續發して重篤に陷り、或は又細菌自己や細菌の發生する毒物が、全身の循環血液中に行き渡る事になつて、所謂膿毒症と云ふ樣な病症の下に、遂に生命を奪はれるような事になります。

實に病原菌の創傷內侵入は恐るべきものであります。創の膿むと云ふ事は、吾々の身體中に細菌が繁殖して、吾々の身體組織の細胞と交戰して居る狀態であります。而して此場合良い都合に細菌が敗けて、容易に治癒に就くか、又反對に身體の方が敗けて、一生に係る樣な事になるかは、神ならぬ吾々の斷言し得る限りではないのであります。

吾等の身體の表面を被ふ皮膚及び粘膜は、吾々の身體防衛裝置の第一線であります。今之れが或一部分に於て破れたとする、卽ち一つの創が出來たとする、此時は吾々の外界に對する防禦に罅裂が出來たのであつて、恐るべき外襲者たる病原細菌の爲めに門戶が開かれた理であります。それ故一つの創を蒙つたと云ふ事は、生命の安定を失つたのであると申しても過言ではありません。既に化膿した創を持て居る者に於ては、何時如何なる危險が來襲するか逆睹し難いのであります。

以上は創傷の化膿と申す題目の下に、最も普通に創傷內に侵入して危害を加ふる釀膿菌に就て述べたのでありますが、創傷より侵入する病原菌は、獨り此種の細菌に限りません。より一層惡性なものが澤山あります。丹毒も、破傷風もそれであります、「ペスト」菌も亦創からも侵入する、結核も黴毒もそうである。此樣な創傷から病毒の侵入する事に因て起る疾病を、一般に創傷傳染病と稱します。創傷傳染病の各病に關する智識に就ては、他日改めて說述する機會のある事と思ひます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

育兒

兒童愛撫の方法に就て

高島平三郎

●●●●●●●●●**愛兒本能は動物に共通。**子供を愛するといふことは、親子の關係ある動物に共通の本能であつて、獨り人類にのみ存する現象ではない。動物の中には、人類にもまさつて子を愛護するやうに見えるものさへもある。つばめが其の巣が火事の爲めに、火焰に包まれて居るにも拘はらず、子供を救ふ爲めに、其の中に突進して、遂に己れの生命を失ふに至るやうな實例は屢〻見るところである。又、鯨が其の子の捕獲されたのを悲しんで、其の場處のあたりを彷徨ひて居つて、遂に己れの生命をも失ふやうなことも、亦、捕鯨家の屢〻經驗するところであるといふことである。然し、多くの動物の中には、時として雌が其の生んだ兒を、自から食するものがあり、或は雄がかゝる行動を敢てする場合もある。此の點より觀察すれば、如何にも動物には親子の情が缺けて居るやうに見えるが、人類に於ても、直接に我が子を食ひこそせね、子供を害し、或は苦しめ、或は之を利用して、全く己れの爲めにするものも、少くないのである故、前に擧げた如き例を以て、直ちに人類と動物との區別を爲すことは出來ぬ。

要するに、愛兒の本能は、人類も動物も共通であつて、特に其の間に著しき區別はない。それ故に、如何に高等なる發達を遂げた人類といへども、其の子を愛するのは、何等の理由を存せず、唯だ可愛いといふ、強き衝動に動かされるに過ぎぬのである。

●●●●●**思慮を缺ける愛撫。**然しながら、人類は唯だ本能の導くがまゝに、行動して居つては、下等動物と何等の差別なきことになるのであるから、人として我

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が子を愛するのは、本能から出るにしても、其の上に叡智を加へた、所謂合理的の愛でなくてはならぬ。唯だ、自己の本能的感情に促がされて、前後の思慮もなく、盲目的に兒童を愛するのは、自己の爲めにも、亦、其の子供の爲めにも、不利益であり、且つ有害な結果を來たすばかりでなく、人類として恥づべきことである。然し又、如何なる人でも、子供を愛する場合には、何等か思慮を施して、愛するのであるが間違つて子供を愛する爲めに、其の子の心身に惡しき結果を來たし、或は病弱のものとならしめ、或は不良のものとならしめ、或は癡愚のものとならしめるが如き例は、一般の眞實の親子の間、然かも美はしい家庭に於ても、屢〻見るところである。これは畢竟、動物的本能に、人類の叡智が間違つて働いた爲めに、來たす結果であつて、最も悲しむべきことゝ言はねばならぬ。

●●●威嚴と慈愛。今、愛撫の方法の間違つた爲めに、子供の惡化する例を擧げて見れば、實に恐るべきものがある。現在、東京を初め、各地の感化院、或は少年監獄等に收容されて居る、青少年の生ひ立ちを見れば、其の多數は、親が愛撫の方法を誤まつた爲めのものである。殊に何れの家庭に於ても、老人は對比の理よりして、幼兒を愛するものであつて、而かも多くの場合、之を玩弄する傾向を有して居る。彼等は、自己の徒然を慰むる爲めに、幼き子供を相手にして、之を愛撫し、其の子供のいふがまゝに、何事をも愜へてやる。それ故に、祖父母の手に依つて育てられた子供の中には、放縱なると共に、薄志弱行のものが多い。之を同樣に、父親を失つて、母親の手一つで育てた子供が、前の如き傾向を有するものが少くない。古の道歌に

父は照り母は涙の雨となり
同じ惠みに育つ撫子花

といふのがあるが、實にその通りであつて、愛の中にも儼乎として犯すべからざる威嚴と、又、和氣靄然たる慈悲とが兩立して居らねばならぬ。

同一主義の下に。　普通の家庭に於ては、嚴父慈母といふが如くに、雙方相俟つて其宜しきを得て行くのであるが、一方が缺けるか、或は雙方とも嚴に過ぐるか、又、愛に溺れるかする場合には、其の子供は必ず何等かの缺陷を來たすやうになるのである。父が常に嚴であつて、母が必ず慈であるといふことは、教育の理想ではない。人間としての其の愛撫は父にせよ母にせよ、又、祖父母にもせよ、嚴と慈との雙方を、適當に持つて居らねばならぬのである。一般に、我が國の家庭に於ては、從來、父は『地震雷、火事、親父』といふ諺の存する如くに、嚴格にして怖るべきものと看做されて居つたが、時としては、父が其の子を溺愛して、母が却つて、之を嚴格に訓練する家庭さへも、少くないのである。是は何れも偏した現象であつて、兩親が共に同一主義に依つて、正當なる愛撫を施して行かねばならぬのである。

溺れたる愛。　子供を溺愛するに、二つの方法がある。一つは、受働的に子供が欲求し來たるところを、選擇なく、辨別なしに、悉く滿足させてやるのである。幼い時は、親が之に堪へて居るが、子供の成長するに及び、其の欲求が次第に增して來て、到底之に堪へることの出來ぬやうになつて、教育者に相談するやうなことが、屢々ある。然し長き間の習慣を一朝にして打破するといふことは、極めて難い。從來自由に與へて居つたものを、急に與へぬことになれば、子供は、其の欲求の衝動に堪へずして、不正の手段を以ても、之を得んことを試みて、遂に人を欺き、或は人の所有物にも手を著けるやうになるのである。

子供の欲するものは、何でも買ひ與へてやるといふやうな、富裕にして、寬大なる家庭に育つた子供が、屢々、他人のものを盜むが如き奇現象を見るのは、決して怪しむには足らぬことである。たとひ、親が俄かに、子供の欲求を拒絶することがなくとも、上述の如き我が儘に育つて居る子供は、自己の所

有物を尊重する觀念が甚だ薄い爲めに物を粗末に取扱つて、或は之を紛失したり、消耗したり、或は妄りに之を他人に與へるが如きことを敢てする。而して又、急に之を欲求するが如き場合に、遂に其の衝動に堪へずして、他人のものに手をかけるやうになるのである。それ故に、幼い時より、子供の欲求を悉く容れてやるのは、之を愛するに似て、實は之を害するのである。如何なる場合にも、眞の愛撫は、子供の欲求について、親が其の利害得失を考へて、其の擧否を決せねばならぬのである。

愛に溺るゝ第二の場合は、發動的に、親より種々のものを買ひ與へて、之が美しい、之が面白い、之が美味しいといふが如くに、子供の欲求せざるに、之を挑發するのである。斯くの如き取扱が、子供の性質を害することは、前の場合と同様であると共に、尙は、其の子の外物に對する淸新なる興味を失却せしめる大害がある。元來、兒童は生れながらにして、其の發達の各時期に、それぞれ强大なる興味を有して居る。好奇心といふのは、卽ち、此の興味の一面を表はした名稱である。此の心ほど、人類智力の啓發に必要なるものはない。されば、子供の幼時より各時代を通じ、成人に至つても、充分に之を擁護して、之を失却せしめぬやうに努めるのが、敎育の根柢でなければならぬ。老人が頑固になり、偏狹になり、進歩が止まるといふのは、種々の事情が伴ふが、好奇心の滅却といふのが、その主なる原因である。若しも、幼時から、此の大切なる好奇心が乏しく、何事にも興味が滅却するやうであつたならば、身體は子供であつても、精神は老人と同樣である、到底充分な發達を爲すことが出來ない。精神低格者、卽ち一般に低能といはれて居るところの兒童を調査して見れば、彼等の興味が普汎的に乏しいか、又偏して居るか、或は好奇心が少いとかいふ、著しい傾向を有して居ることが解かる。元來、子供の欲求せざるに、老人や、大人の考を以て、妄りに種々のものを供給するのは、食物を欲求せざるに、强ひて

種々のものを食せしめんとすると同樣で、遂には、胃を害して、食慾を減却せしむるに至るに過ぎぬのである。

富豪の子弟殊に所謂成金の家に育つた子供に、賢きもの丶少ないといふのは、固より種々の原因が存して居るけれども、其の大なる條件は、前に述べた如く、妄りに周圍から種々のものを、過剩に供給して、其の好奇心や、興味を減却さするといふことに存する。されば、かくの如くして子供を溺愛するものは、恰も、其の子を低能たらしめることに、努むるに外ならぬのである。

愛の種々。然らば、眞の愛撫は、如何にすべきであるかといふに、之を説く前に先づ愛の何たるかを説明せねばならぬ。

元來、愛と呼ぶ精神現象には、種々の類がある。單純に愛と名けても、其の作用は、甚だ複雜なものであつて、骨相學者の説くが如く、唯だ頭の何れの部分が突起せるが故に、愛情が深いとか、薄いとかいふことを斷定すべきほど、簡單なものではない。勿論、愛と總稱して居る中には、前に述べた本能的の情の如く、何等の理由なしに、自然の勢力として引きつけらる丶ものもある。此の種類の愛は、心理的といふよりは、むしろ殆んど純粹の生理作用に屬するものである。例へば、幼兒が饑を滿足させて與れる母や、乳母を愛慕するが如きは、此の種類に屬するのである。

又、心理的のものとしても、唯だ五官に滿足を與へる點からして、或るものを愛し、慕ふこともある。これらは直感的愛情と呼ばれるものであつて、或は美しい色、面白き形、快き聲、滑かなる皮膚など、全體に人に快感を與へるところのものは、此の種の愛の對象となることが出來る。

親が子供を愛する情の中には、本能的のもの丶外に、確かに是等直感的の滿足といふことが這入つて居る。子供の皮膚の滑かにして、其の肉の柔きこと、其の色、其の形、眼に、口元に、或は其の聲に、或

は運動の狀態に、親にとつては、何れも皆な、限りなき快感を與へるものであつて、是等が綜合して、強き愛情を惹き起すのである。尙ほ愛情の進んだものに、同情より起るものもある、之を通じて來たるところの愛は、本能、直感等の如何に拘はらず、直ちに共通の情に依つて生ずるのであるから、如何なる醜いものに對しても、亦、自然の本能としては、愛の成立せざる性質の對象に對しても起り得る情である。されば同情より起る愛情は、其の範圍が最も廣い。同類たる人に對しては勿論、動物、植物等の生命あるものより、遂には無生物にまでも、之を及ぼすことが多い。自己の持ち續けたものを、愛護して、之を汚損し、之を紛失した場合に、痛恨措く能はざることは、何人も經驗するところであらう。親が子供に對する愛情の中で、特に必要なものは、此の種の愛である。卽ち、子供と自己とが共鳴し、同感して、初めて彼れに對して適當な愛撫を施すことが出來るのである。それ故に、同情の念が乏しいものは、愛情も亦、從つて乏しく、かゝる人に對しては、子供も、親しみが極めて乏しい。

愛と理解。然し、眞の同情は、眞の理解より來たらねばならぬ故、從つて、愛にも亦、理智の加はることが必要となつて來るのである。尙ほ愛は人の優れた點を、充分に理解する點より生じ得るものであつて、これが極めて高い人類的愛情である。子供に對する愛も、唯だ小さき動物を愛したり、手馴れた物品を愛すると異なつて、其の子供の優れた點、例へば、智力に於て優さつて居つて、將來有望であるとか、或は身體の發育が完全であるとか、品性に健實な點を認めるとか、何等か彼れの長所を認めてやるといふことが、敎育上、極めて大切なる愛情の基礎となるのである。

要するに、高尙なる愛情、卽ち人獸共通の愛以上のものは、理解である。親として子供を充分に理解してやるといふことは、最もよく子供を愛してやる根柢をなすのである。子供の中に、己れを見出し、

己れの子供を見出すこと、即ち、共鳴、同感は、全く相互の理解に依つて成立つのである。或る意味より言へば、人生は絶えず、他人の中に己れを見出さんとして悶えて居るのである。眞にそれが見出された時には、其の人に對する衷心からの愛が起り、信を生じ、敬が涌いて出るのである。互にかゝることを交換して、進んで行くのが人生であつて、多くの人が、或る一人の中に自己を見出し得る人は偉人である。即ち何人も其の人に依つて、慰めを與へられ、勵みを與へられ、滿足を感ぜしめられる人は、最も尊敬すべき、偉大な人格と言はねばならぬ。親子の間の愛情も、之と同様であつて、親が子供の中に自分を發見して、其の愛する自己が益々發展するやうに努めて行くことが、眞の愛撫に根柢を與へるものである。然しながら、又考へねばならぬことは、單に、親が自から己れの偏性、傾向等に囚はれて、子供をして必ず、其の如くにならしめんとするが如きは、甚だ誤まつたことゝなるのである。人には自から欲求して、自己に得んことを努めても、得ることの出來ざる性質、活動が、いくらもある。即ち、自己の理想としては、かくありたいと思ふても、容易に之を自己に實現することの出來ぬ場合が多い。然るに、かゝる傾向や活動が、我が子に於て萌芽を有して居る如き場合に於ては、自己に無きものは、子供に依つて滿足されるのである。眞の我が己れの肉體に存せずして、却つて第二の我たる子供の中に存するのであるから、一層子供の是等の性質を、大切に擁護して、充分の發育を遂げしめねばならぬ。

其の他、子供の中には、己れと著しく性向の異なつたものがある。かゝる場合には、互に排斥し合ふ如き結果を生じて、時とすると、子供の成長の後には、親子の愛情が冷却して、互に反撥するやうな結果を來たすことさへある。然しながら、此の際、親たる人は、人の個性に差異のあることを察し、然ずして、自己の如きものゝみが、各人の通性ではない。人生は極端に言へば、個々皆な異なれる、個人の集

合に依つて、其の圓滿なる活動を營んで行くのであるといふことを察して、眞に其の子供を理解してやれば、其の中には、必ず其の愛情が生じて來るものである。如何に個人差が甚だしいと言ふても、何等か共通の點が必ず存在するものである。それ故に、親は自己と異なり、自己の氣に入らぬ子供なりとて、一概に之を排斥し、惡み、他の子供と取扱を異にするやうなことがあつてはならぬ。

ルソーが『エミール』の卷首に記して、自然は總べて善であつて、人爲は總べて惡であるといふことは、そのまゝ之れを眞理として認容することは勿論出來ぬ。然しながら、人爲が善である場合は、そのものの自然を圓滿ならしめ得る道を盡すことでなくてはならぬ。それ故に、親の子に對する眞の愛情も、子供をして子供たらしめることである。言ひ換へれば、子供を取扱ふに、大人の標準を以てせず、子供の各年齡に應じ、時代に從つて、最も子供らしく、子供として、必要なる心身の活動を圓滿ならしめ、之に依つて自然の發育を完うせしめることに存するのである。

尙ほ、子供を子供たらしめるといふ、簡單なる言葉の中に單に、發育時期の差異に依つて、其の取扱を異にするのみならず、或は男女の差異、境遇の異同、個性の狀態等、精密に、各〻の子供を觀察し、其の子供をして、子供自からの、あるが如くならしめねばならぬ。此處に子供の活動の眞の生命が存して居つて、此處から、自學自習の力も生じ、又、獨創、發明の工夫も起つて來るのである。形式的に行はれて居る幼稚園の保育に於ては、幼兒に何事かを課する場合に、僅かに數分、或は十數分にして、既に子供が倦厭、疲勞を感ずるにも拘はらず、モンテッソリーの『子供の家』に於ては、一つの玩具に依つて、子供が種々の活動を、數十回或は數百回も試みて、二時間も、三時間も、此の活動を續けるといふことである。これは何の爲めであるかといふに、全く子供の自然の興味を捕へて、其の活動を擁護する爲め

である。
然るに、自發的に種々の活動が、自由に發生する時代の幼兒を驅つて、十人、百人、同一のことを爲さしめんとする場合には、彼等は直ちに興味を失却して、速かに倦厭、疲勞を感ずるのである。されば、親の子に對する眞の愛撫は、身體上の養護、卽ち、衣服、飲食、住居、運動、遊戲のことから、精神上の敎育、卽ち、智能の啓發、品性の陶冶等に至るまで、一に其の子供のある如くあらしめるといふことを、本則として進ませねばならぬ。然らば、其の子供が如何にあるかと同時に、又、如何にあるべきかといふことを、充分に知了するといふことは、親としての最も大切なる務といはねばならぬ、之を知るが爲めには、兒童學を初めとして、心理學、敎育學、衞生學等の知識を有することは、必要である。
要するに、科學の光明が照らさゝるところには、眞の敎養も、愛撫も行はれることが出來ない。余は、我が國一般の家庭に、一層廣く、一層深く、科學の光が射入し、親が眞の知識に依つて、其の子を最も人類的に愛撫せんことを望んで止まぬものである。

雜報

○新婦人協會の議案

平塚明子市川房枝等の婦人連に依て組織されたる新婦人協會は今期議會に花柳病男子の結婚禁止と治安警察法の改正案を法律案として提出する筈にて去月二十九日協議會を開き永井柳太郎、林毅陸、根本正、樋口秀雄、荒川五郎、星島二郎、高橋本吉等の各派代議士出席したりと。

○女子大學夏期講習會

日本女子大學にては來る七月二十一日より例年の如く左記科目の夏期講習會を開催す申込期日　七月二十日迄なりと。

▲午前の部　七月二十一日より二十九日、八時より十二時迄　兒童に關する諸問題（講習料四圓）（一）兒童の思考と想像（文學博士桑田芳藏）（二）兒童の身體と疾病（醫學博士太田孝之）（三）兒童の性格及び其異狀（醫學文學博士富士川游）（四）內外に於ける幼兒保護一般（內務省囑託へ生江孝之）（五）童話の利用と其效果（巖谷小波）
▲午後の部　七月二十三日より二十九日二時より五時迄　趣味及手藝（講習料三圓）（一）配色及圖案（美術學校教授森田龜之助）（二）染織藝術（齋藤五百枝）（三）實地練習（淸野ゆう）

○衛生思想普及竝徹底に關する意見

大日本醫師會にては傳染病豫防法に關する件竝に衛生思想普及に關する件に就き內務大臣より詳細の意見を徵されたるに對し東京府に於てはこれが調査審議の委員を擧げて數十回の會合を經三月三十一日大日本醫師會に答申したるが、その全文左の如し。

傳染病豫防法改正に關する意見如何

法定傳染病を左記の三類に分つ事

第一類

虎列剌「ペスト」痘瘡

第二類

腸窒扶斯「パラチプス」發疹「チプス」赤痢、疫痢猩紅熱

第三類

實布垤里亞、流行性腦脊髓膜炎、百日咳、麻疹醫師第一類又は第二類傳染病患者を診斷し若くは其死體を檢案したるときは、其家人に消毒法を指示し、且つ速に關係官公吏に屆出る事其轉歸の場合亦同じ。

醫師第三類の傳染病患者を診斷し若しくは其死體を檢案したるときは其家人に消毒方法を指示すること。

第一類傳染病患者は速に傳染病院又は隔離病舍に收容すること。

第二類の傳染病患者は自宅治療を本則とする事、但當該吏員又は醫師豫防上必要と認むる時は傳染病院又は隔離病舍に收容する事。

醫師第二類第三類の傳染病患者又は其家人にして消毒完全ならずと認むるときは之を當該吏員に申告する事。

當該吏員第二類第三類傳染病患者又は其家人にして消毒完全ならずと認むるときは更に消毒を命ずる事。

醫師第一類傳染病保有者を發見したる時は當該吏員に申告する事。

第一類傳染病豫防に關する諸費は國庫に於て其三分の二以上第二類傳染病豫防に關する諸費は其三分の一以上を負擔す。

本法に據り傳染病屆出をなしたる醫師には命令の定むる所に依り報酬を與ふる事。

衛生思想普及竝徹底に關する意見如何

第一

敎科書中に衛生に關する敎材を增加すべき事。

小中學校高等女學校師範學校等の敎科書を閱するに衛生に關する敎材何れも過少にして而も傳染病に關する敎材の如き殆んど見るべきもの無し、就中師範學校敎科書中に衛生敎材の少なるは衛生思想の普及徹底上一大缺陷なりと云はざるべからず。

第二

敎科書の編纂に際し醫學者をして之に參加せしむる事。

敎科書中に衛生思想に關する敎材の豐富ならざるは敎科書編纂に際し醫學者の之に參加せざるに因るものと信ず。

第三

學校敎員の爲め時々衛生に關する短期講習會を開催する事。

小中學校程度の敎員をして衛生に關する知識を豐富ならしむるは衛生思想の普及徹底上最も效果あるものと信ず。

第四

法令を以て權威ある町村衛生組合を組織せしむる事。

現今の衛生組合なるものは元來隨意組織に屬し普遍的ならざるのみならず經費亦多くは貧弱にして殆んど有名無實何等の見るべき程の效果あるなし、政府は須く其經費の幾分を補助し組合をして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

現在醫師會と聯絡を保ち衛生思想の普及徹底に盡力せしむべし。

第五

各府縣に衛生視察員を設置する事。

府縣衛生視察員を設け之をして常に市町村の衛生狀態を巡廻視察せしめ且つ地方衛生組合青年團等を指導誘掖し專ら衛生思想の宣傳及發達に從事せしむべし。

第六

普遍不斷に衛生的宣傳を行ふ事。

文書講話圖畫幻燈、活動寫眞演劇等最も俚俗に通じ易き單易簡明なる方法を選擇し適當なる時期と場所とを利用し怠らず撓まず衛生思想の宣傳を勵行すべし。

會報

○本會例會

去る五月十七日午後一時半より東京女子高等師範學校內作樂館に於て例會を開き醫學士暉峻義等君を講師とし「婦人の社會的生活に關する雜感、特に乳兒との關係に就て」と題せる講話あり。聽衆を裨益する所多大なるものありき。

○新潟支會

新潟支會にては過般地久節に際し市內三婦人會合同にて白山神社社務所に於て午前十時より祝賀會を開催し高田教育會長の開會の辭次に會員起立君が代及び金剛石の歌合唱次に矢浪高等女學校長の祝辭演說ありて晝食午後は餘興に移り食後の運動木德某の新內小學校生徒の雀の問答安宅の關等の遊戲福引岩瀨夫人渡邊某及び其他有志の三曲合唱等あり午後四時盛會裡に閉會せり當日來會者は知事夫人を始め加勢中村竹山關澤田宮川福田等の各夫人高田北村兩女史等約百名に近き出席ありき。

○入會者

○事務所申込み

新潟縣北蒲原郡杉浦村字松岡　贊成會員　馬場常太

府下柏木一〇五　贊成會員　安藤兼吉

○新潟支會

幹事澤田いつ子紹介　特別會員　林しづ子

大橋とし子紹介　特別會員　有田ミイ子

○轉居

芝區より府下荏原郡蒲田村へ　高山愛子

福島縣より府下雜司ヶ谷字龜原六二一へ　古澤みれ子

長崎縣より山口縣豐浦郡長府町字三島九二二へ　長門久壽子

○寄附

金拾圓也　男爵母堂　西升子

私立大日本婦人衛生會役員氏名

總裁　東伏見宮妃周子殿下
會長　侯爵夫人　鍋島榮子
副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

理事	鳩山春子	同	長谷川仲子
同	岡田德子	同	高木鐐子
同	山木多穗子	同	天野多喜子
同	三浦敎子		
評議員	入澤常子	同	羽田三緒子
同	服部繁子	同	原光子
同　子爵母堂	仁禮壽賀子	同　男爵母堂	西舛子
同	土肥多越子	同	緒方悅子
同	岡山とし子	同	小川孝子
同　男爵母堂	加藤鈴子	同	片山龜子
同	吉岡彌生子	同	丹波貞子
同	高橋孝子	同	田村きよ子
同　男爵母堂	南部隈子	同	中濱芳子
同	山口貞子	同	松平芳子
同　子爵母堂	松井正子	同　男爵夫人	古市幸子
同	小松勇子	同	近藤憲子
同　男爵母堂	青山孝子	同	相磯まさ子
同	岸澄子	同	菊池峯子
同	三宅藤子	同	宮木樂子
同	守屋千代子	同	瀨川さわ子

大正九年七月二十七日印刷
大正九年七月三十日發行

東京市本郷區駒込千駄木町五十八番地
編輯者兼發行者　莊司秋次郎

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者　柴山則常

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所　合資會社　杏林舍

東京市本郷區駒込千駄木町五十番地
發行所　私立大日本婦人衛生會事務所
（振替東京一〇六〇〇番）

賣捌所
東京市本郷區龍岡町　吐鳳堂　京都市寺町二條南入　若林茂一郎
同市銀座四丁目　東海堂　東京日本橋區吳服町　北隆館
同市京橋區鎗屋町　眞明堂　同市神田區表神保町　東京堂
同市本郷區本富士町　明文館　同市本郷區本富士町　盛春堂
同市同區作木町　南江堂支店　名古屋市榮町六丁目　丸善書店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

婦人衛生雜誌第三百五十四號　大正九年七月三十日發行

陣痛催進劑
ピツイトリン

ピツイトリンの產婦人科領域に於ける聲價は眞に隆々たり。之蓋、本品は子宮に作用して之を收縮せしめ、而も他の子宮緊縮藥に於けるが如く、其性質强直性ならず、〇・五乃至一・〇cc.の注射により、能く速に陣痛强盛を來して、產期を短縮せしむる效果、顯著確實なればなり。

ピツイトリンは又强心、止血、利尿の作用ありて種々なる內科的疾患に試みられつゝあり。

【文獻集あり御申越次第進呈す】

滅菌𤿎球　一cc.入
三管壹箱

姙娠惡阻特效藥
ユゴール

ユゴールはドクトル飯田左三先生の發見せられたる惡阻の治療藥にして、多數實驗家の臨牀成績は姙娠惡阻に對し、顯著確實の奏效を示したるのみならず一般諸種の嘔吐患者に對しても亦用ふるに足る藥劑なるを明にせり、而して**ユゴール**は些の副作用なく、之れが應用は何等の不安、何等の顧慮をも要せずと稱せらる。

【文獻御申越次第進呈】

◆賣品種類◆

注射用ユゴール
一cc.𤿎球十管入

內用ユゴール
膠球(〇・三瓦)五十球入
同百球入

本社　東京室町

發賣元　三共株式會社

出張所　大阪平野橋